埼玉県地域学校協働活動情報通信

CoLLABo

2026 Vol.2









特集　富士見市立本郷中学校における職場体験

～コーディネーターの役割～





【特集】 職場体験～コーディネーターの役割～



幼稚園での職場体験の一コマ

職場体験も地域学校協働活動

今回の特集は職場体験です。職場体験は地域の商店街や企業、個人経営の店などで生徒が実際に働く貴重な機会を提供するもので、地域学校協働活動の一つです。中学校の学習指導要領では、「自然体験や職場体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動等の体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。」とあり、「主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること。」と示されています。

三日間の職場体験を七年ぶりに実施

職場体験は、多くの中学校で総合的な学習の時間に行われています。今回訪問した富士見市立本郷中学校は、コロナ禍を経て七年ぶりに職場体験を再開しました。



本郷中学校の廣井賢司校長先生（右写真）は、着任以来、生徒のために職場体験を実施したいという熱い思いがありましたが、教職員への負担を増やすことになるといった側面も考えると、再開することへのハードルも高く、頭を悩ませる日々を送っていました。今年度、三年目にして念願叶って開催にこぎつけました。

再開に当たっては、学校応援団コーディネーターである柳原英子（やなぎはらひでこ）さんが従来の事業所に加えて約十か所もの新たな受け入れ先を確保し、四十四の事業所から協力を得ました。そのおかげで本郷中学校の二年生たちは幅広い事業所から選択でき、充実した学びに繋げることができました。

多くの事業所が職場体験を実施するに当たり、参加する生徒にやりがいを感じてもらえるよう、そして楽しんで職場体験をしてもらえるよう、それぞれ工夫をこらしてくださったようです。教職員の間でも職場体験を実施したことは「大正解」と評価し、すでに来年度の職場体験のことも見据えています。

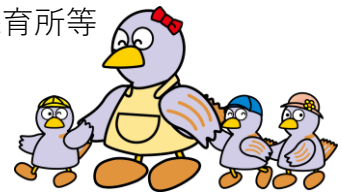
職場体験で見られた生徒の姿

学校運営協議会の委員でもある柳原さん。職場体験のことが学校運営協議会で話題となり、真っ先に声をかけたのは東みずほ台商店会長で飲食店を営む和田亘由（わだのぶよし）さんでした。

和田さんにお話を伺うと、経営するお店の職場体験に参加した生徒の積極性を高く評価し、「やることがなくても率先して動き、忙しい昼時に洗い物をしてくれて本当に助かりました。学校では経験できないことを自分なりに考えて行動する力を、学校以外の場所で発揮してくれたことが素晴らしかったです。」とうれしそうに語ってくれました。

- 飲食店
- 薬局
- 花屋
- 自動車販売店
- スーパー
- 公民館
- 幼稚園・保育所等
- 医療施設
- 介護施設
- 宿泊施設
- 入浴施設
- 文化施設　等





3日間の職場体験に協力いただいた主な事業所

受け入れることに最初は不安も

職場体験について話があったとき、中学生を受け入れることには当初不安もあったそうですが、四年目の飲食店店主として、二年目の商店会長として、地域貢献のことを考え、職場体験に協力することを決意。西みずほ台商店会にも声をかけ、学区外の事業所からも協力を得ることにつながりました。

失敗を恐れず挑戦を

和田さんの経営するお店で職場体験をしていた生徒の一人は、以前、来店したことがあり、「お客として気づかなかったことを職場体験で経験することが沢山あって良かったです。」と感想を述べてくれました。和田さんは「現代の子供たちは、知識は多いけれども体験が不足しています。実際にやってみてできなかったことを実感するという経験が大切。情報を見ただけで知った気になることも少なくないので、失敗を恐れずいろいろなことに挑戦してほしいです。」と中学生に期待することを話してくれました。





花や写真で飾られた校舎内の様子



コーディネーターの柳原さん（右）と
商店会長の和田さん（左）

本郷中の応援団は、掲示、生け花、資源回収、畑の管理、学校行事等の写真撮影など多様な活動が組織的に行われており、それらをまとめ、何かあればすぐに連絡を取るのが柳原さんの役割です。学校を訪問した際、まず驚いたのは、玄関の花や生徒の輝く姿が写る写真の数々。「気付くと職員玄関に花が生けられており、二週間に一回のペースで花が交換されていて本当にありがたいです。」と廣井校長先生。校長室や玄関にも折り紙の飾りが施されており、美しい学校環境が整っていました。

資源回収の活動で参加するメンバーが固定しつつある中でも、資源回収の来校ついでに挨拶運動を行うなど活動の幅が広がり、生徒の豊かな心の育成に向けた地域の方々の協力を得られています。



学校応援団の紹介





資源回収を行っている学校応援団作成の掲示物

柳原さんの考えるコーディネーターは一言で言うと「まとめ役」。「とにかくネットワークをつくることが私の仕事。それぞれの得意や宝物を見つけるために、いろいろな人と仲良くなっています。」と笑顔で語ります。現在は、柳原さんのネットワークを生かした「本郷中人材バンク」構築に取り組んでいるそうです。

コーディネーターが学校運営協議会委員であることは、地域学校協働活動を意義あるものとして進める上で大変重要なことです。

また、柳原さんの活動の源には廣井校長先生の存在も大きいようで、お二人からお話を伺っているときに感じたことは、「何事も楽しく」という思いが共通していることです。

一方で学校応援団の課題は高齢化であり、新たな人材の募集が進まないという学校応援団も少なくありません。柳原さんは日々人と話しながらネットワークを広げており、あらゆる場面で人と関わっています。後任候補についてはすでに何人かに声をかけているとのこと。コーディネーターとして力を発揮するためには「人が好きなこと」が必要な要素だと話します。

健康の秘訣は…



地域とともにある学校を熱く語る

七年ぶりの職場体験を実施するに当たり、十か所近くの新たな協力先が実現した背景には、商店会長をはじめとした地域の方々の結束がありました。学校応援団は強固な組織であると感じている柳原さんは、地域の協力に深い喜びを感じています。ご自身も本郷中の卒業生であり、地域ぐるみで子供を見守る大切さを子供のころから身をもって実感しており、「学校のために体を動かすことが健康の秘訣」と話してくれました。現在は二十名程度の学校応援団とSNSを通じて連絡を取り合っています。

地域からのお褒めの言葉

活動をする中で、特に嬉しいのは地域の方から「本郷中の生徒は挨拶がよくできる」と評価されることだそうです。柳原さんも生徒の挨拶に誇りを持っており、学校内外ですれ違ったときに声をかけてくれる本郷中の生徒の姿を頼もしく思っています。

地域のつながりが希薄化している中、県内に地域の方と自然な挨拶ができる環境がここまで整っていることはうれしいことです。

地域ぐるみで子供を温かく育てる意識は、柳原さんの中心的な役割のもと、今後さらに広がっていくことでしょう。



学校の至るところに生徒の輝く写真が

ボランティア活動

本郷中学校における地域学校協働活動は、ボランティア活動も大変盛んに行われています。

学校の裏にあるコスモス街道の整備は元々地域の方の手で行われていました。そこに、本郷中の生徒が加わり、年々参加者が増え続け、今年は四日間で延べ百五十名の生徒が参加しました。更に卒業生も参加したそうで、本郷中で培った地域を愛する心は卒業後も根付いています。大人だけでの作業は黙々と行われがちですが、子供たちが参加してくれると会話が生まれ、楽しく作業ができます。



会話することで作業もあっという間に

東みずほ台まつりでも運営ボランティアとして本郷中の生徒が活躍しました。ゲームのお手伝いをしたり、駐輪場の自転車をきれいに並べたり、地域のお祭りを陰で支えてくれました。

職場体験で沢山の事業所が貴重な時間を本郷中の生徒のために割いてくれたのも、日ごろから地域の方々に挨拶し、地域のために力を発揮する生徒の姿が様々な場面で見られていたからこそなのだと感じました。

今後も学校や地域で活躍する本郷中学校生の成長が楽しみです。



駐輪場の整備をする生徒



芸術文化部の絵で華やかに

学校経営の基本理念（スクール・ミッション）

ひたむきに伸びようとする生徒たちをサポートする学校

学校教育目標

- **よく考え、学び、求める生徒**
- **豊かな心をもち、思いやりのある生徒**
- **心身を鍛え、勤労と体験を重んじる生徒**

「新しい方へ、難しい方へ、おもしろい方へ行く本郷中学校」（令和8年度学校だより5月号）
本郷中学校では、令和7年度から一定期間で担任が入れ替わるチーム担任制を導入。
学年チームの先生全員で一人ひとりの生徒を見守っています。

富士見市立本郷中学校
生徒数：３５８名（５月１日現在）
住所：富士見市大字水子５３９
学校HP：富士見市立本郷中学校｜富士見市

連載

埼玉の学校応援団

令和８年度の地域学校協働情報通信「COLLABO」では、「学校応援団」の前身である「元気な学校をつくる地域連携推進事業」において地域連携推進校として指定されていた学校にスポットをあてて、現在の活動状況等について報告いたします。

川口市立並木小学校

サマースクール「体験学習」

川口市の小中学校では、二学期をスムーズに迎えられるよう、夏休みの終わりにサマースクールを実施しています。

今回訪問した並木小学校のサマースクールは二日間にわたって行われ、一日目は担任の先生が交代して授業を行う「わくわく担任シャッフル企画」、二日目は地域の方が講師となって実施する多彩な「体験学習」が行われました。



開校７３年目となる並木小学校

八月二十八日金曜日、二日目のサマースクールは五・六年生のみを対象とした「体験学習」。うどん打ちやケーキ作り体験、ミサンガ作りなど十一の教室が用意され、児童は有意義な時間を過ごしていました。昨年度までは六年生のみが対象でしたが、今年度からは五年生も対象となり、前半が五年生、後半を六年生の時間として開催しました。先生方もそれぞれの教室に入って地域の方に協力し、子供とともに体験学習を楽しんでいる様子でした。教室によっては、先生方が講師を行うところもありました。



児童を出迎える案内表示

以前は社会福祉協議会や公民館と共催で開催された「三世代ふれあい活動」として地域の方との交流がありましたが、時代の変化やコロナ禍を経て様々な活動や地域とのつながりが縮小していってしまいました。

そこで、学校応援団の活動を徐々に再開し、地域の「元気」を取り戻すため、また子供たちに多彩な実体験を積む機会を提供するため、民生委員等の地域の方を講師とした「体験学習」を実施することになりました。

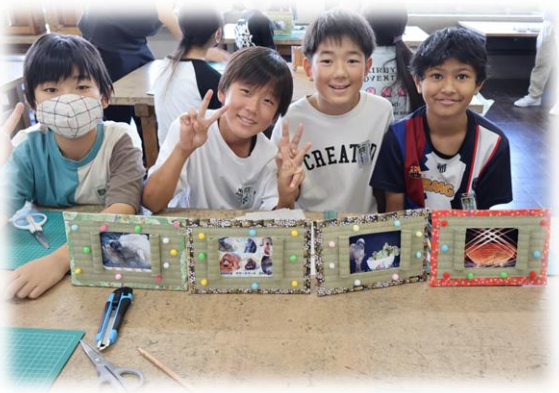
並木小学校では、平成十七年度の「元気な学校をつくる地域連携推進事業」において、研究テーマを「元気な子ども」の育成として取り組まれました。時代が変わっても当時のテーマが今もなお根底にあるのだなと感じました。

ハンドベルの教室では、講師の話に合わせて、地域の方が自然にハーモニカを吹き始めるという流れができていることに驚きました。児童はそのハーモニカの音色に合わせてハンドベルを鳴らすことができ、地域の方との演奏を楽しんでいました。

畳フォトフレームでは、いぐさのにおいに包まれた図工室で仕上がった作品をうれしそうに見せてくれる児童の姿が印象的でした。畳店を営む講師の新関博（ひろし）さんは「畳に触れる機会が少なくなっているので、とても貴重な時間です。」とお話してくださいました。

和菓子づくり体験には地域の和菓子屋さんが、うどん打ち体験には地域の割烹料理屋さんの協力により、おいしくできあがり、児童も満足した表情でした。

できる人が できるときに できることを



完成した畳フォトフレーム

自分たちが住んでいる地域の身近なプロフェッショナルの方から学ぶことのできる並木小学校のサマースクールは、児童にとってかけがえのない時間であり、また二学期も元気に頑張ろう、という気持ちになるイベントとなっていると感じました。

五月二十七日に開催された学校運営協議会では、学校応援団の活性化について話し合われました。並木小学校の学校応援団のテーマは「できる人が、できるときに、できることを」。黒澤誠校長先生は、「学校応援団の人員募集は随時行っていますが、なかなか集まらないのはどの学校でも共通する課題となっています。ただ呼びかけるだけではなく、今後は子供の力も借りて人員を集めていきたいです。」と語ります。



子供の姿に微笑む黒澤校長先生

黒澤校長先生は、十七年前にも並木小学校に勤務されたこともあり、当時から「地域がつくりあげた学校」ということを感じていたようで、今も変わらず地域の方の協力が手厚いそうです。子供も仲良く、家族も仲良く、地域も仲良くなってほしい、そうなるには学校がその役割を果たすべきところは大きい、と黒澤校長先生。学校応援団の名称やキャラクターについて児童から募集したり、学校応援団の方にバッジをお渡ししたりして、地域の方が学校に入りやすい環境にしていきたい、と思いを語られました。今後より一層地域とともにある学校づくりを進め、ますます元気になっていく並木小学校が楽しみです。

元気な子どもを育成する並木小学校には、子供たちの笑顔、教職員の熱意、保護者、地域の方々の温かいまなざしがあふれています。



うどん打ち体験



ケーキづくり体験



ミサンガづくり



グループチャレンジゲーム



英会話教室



和菓子づくり体験



バルーン



面白実験



スポーツ



音楽体験

学校教育目標：知・徳・体の調和のとれた
心豊かなたくましい児童の育成
校訓：「健康　勤勉　敬愛」
児童数：５８７名（５月１日現在）
住所：川口市並木１－２４－１
学校HP：https://kawaguchi-namikisho.edumap.jp/

第一回地域学校協働活動推進セミナー

八月四日（火）、埼玉県県民健康センターにおいて、教職員や学校運営協議会委員等の地域住民、市町村の担当者を対象とした、「第一回地域学校協働活動推進セミナー」を開催し、文部科学省総合教育政策局CSマイスターの朝倉美由紀氏に、「地域学校協働活動につながる学校運営協議会の充実」というテーマのもと、講演とワークショップを行っていただきました。

セミナー前半の講演では、理想的な学校運営協議会の姿や、地域と学校のつながりの在り方について話していただきました。



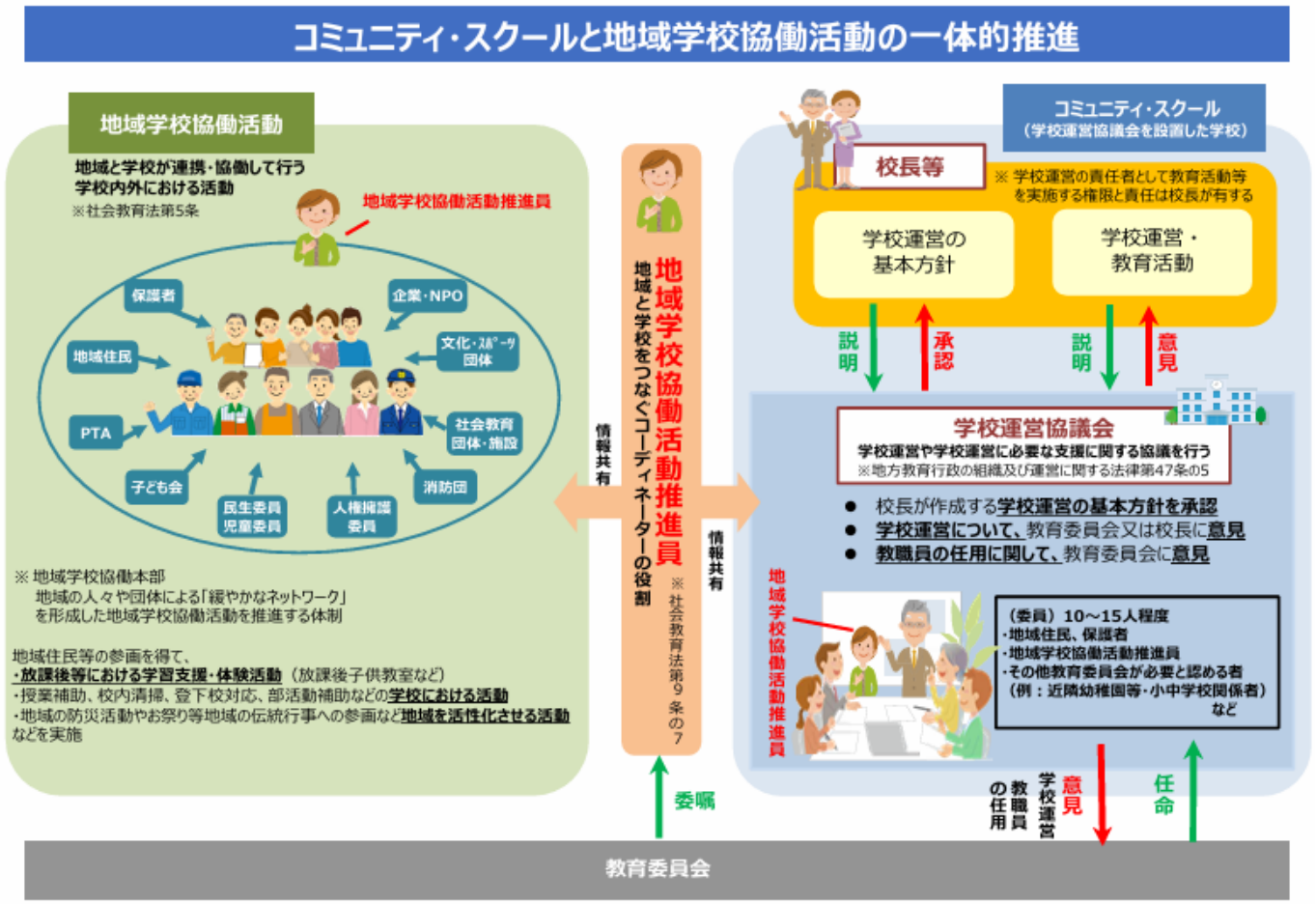
文部科学省CSマイスター
朝倉美由紀氏

後半は、講演の内容を踏まえて、ワークショップを行いました。参加者は四人ずつのグループに分かれ、テーマに対する考えを付箋や模造紙に記入してまとめる活動を行い、その中で、立場や役職が異なる相手との活発なコミュニケーションを通して、積極的な交流や意見交換を行いました。



４０名の方々に参加していただきました

今回は、このセミナーの実際の様子について、さらに詳しく紹介していきます。



「コミュニティ・スクール関係課説明資料」（文部科学省　令和8年４月）

学校運営協議会と地域学校協働活動とは

子供たちの教育への支援として、地域の方々による協力は欠かせません。「地域学校協働活動」とは、幅広い地域住民等の参画を得て、地域と学校が連携・協働して行う様々な活動のことです。また、教育委員会により任命された委員が、一定の権限を持って、学校の運営とその運営への必要な支援について協議する合議制の機関が、「学校運営協議会」です。そして、「コミュニティ・スクール」とは、「学校運営協議会」を設置している学校のことで、埼玉県では八十五・四%の学校が導入しています（政令市を除く。※令和七年度文科省調査）。

「学校運営協議会」と「地域学校協働活動」は、連動して機能することによって、児童・生徒に対する更なる教育効果の拡大が期待されています。そのため、この二つをつなぎ、より良い教育活動の実現を目指すため、「地域学校協働活動推進員等（地域と学校をつなぐコーディネーター）」の方々の存在はとても大きな役割を担っています。



まずは自分の考えを整理するところから



模擬熟議を通して考えを深めました

学校運営協議会の意義と現状

講演の中で、まず朝倉氏が話題に上げたのは学校運営協議会制度の意義と行政が横串を刺して協力していく重要性でした。子どもたちの笑顔のために進められるべき学校運営協議会制度の停滞を指摘し、教育委員会が主体となって、関係する部署間の連携が必要不可欠であると呼びかけました。また、教育委員会から委嘱され、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の橋渡しの役割を担うコーディネーターがボランティアであったり、教職員が請け負ってしまったりする状態を取り上げました。予算の問題も含め、このような問題解決には教育委員会としての方向性を明確に提示することが大事だと朝倉氏は強く語りました。



真剣に取り組む参加者

学校運営協議会の意義について、文部科学省の資料を引用しながら再確認し、その必要性と様々な立場の人が意見を交わす非常にホットな制度だと認識を確かめました。さらに、高知県の小学校を例に挙げ、地域学習・防災・福祉といった領域を一年ごとに完結させて学習を進める従来の方法を見直し、子どもたちと意見交換を行い学年が進むごとに内容が発展していく仕組みを確立させた好事例が紹介されました。

学校運営に保護者や地域住民等が参画することを通じて、以下の事項を推進。

① **地域の声を活かした学校マネジメントの強化**

- 「育てたい子供の姿」を学校・地域が共有し、児童生徒・教職員・保護者・地域住民の声を聞きながら、熟議を通して、学校の教育方針や教育活動に地域のニーズを反映する。
- 教育計画の策定・実施・評価のプロセスの中で、教育活動の成果や課題を学校と地域で共有する。
- 学校と地域が協議、説明責任を果たすことを通じて互いの信頼関係を築き、地域とともにある学校づくりを推進する。

② **地域資源を活かした教育の充実と課題解決**

- 保護者や地域住民等が協働するプラットフォームの中で、
  - ・地域の創意工夫を活かした体験的・探究的な学習等を推進し、児童生徒の資質能力の向上を図る。
  - ・子供・学校・地域の課題解決を図ることで、学校を核とした地域づくりを推進する。

学校教育協議会制度の意義

260423　コミュニティ・スクール関係課説明会資料（文部科学省）



課題と今後の方策

すでに実践されている学校運営協議会制度について頻発している課題を分類し多様な方面からのアプローチが必要であることが示され、異なる境遇、経歴の人が一堂に会して議論を交わすことの難しさと、歯車がかみ合った時の効果が改めて感じられました。校長が学校運営協議会を学校を経営する方策の一つとして理解し、会議のあり方や学校組織との関連付けをデザインする必要があります。

学校運営協議会の課題例

・見通しや目的が見えない
・新しい取り組みばかりが増えていく
・教職員と委員の接点が少ない
・社会に開かれた教育課程の実現を踏まえた子供の学びが話題になっていない　など

学校運営協議会での話し合いはすんなりいかないことが多いでしょう。それでも、お互いの立場を理解し合い、実践してきたプロセスを糧に何を誰がするのか考えていくことが重要だと考えられます。

なくす かえる へらす検討を

講演で多く話題に上がったのは学校運営協議会の実施が年三回ほどの学校が多く、話し合いがなされたとしても一方的な発信や形骸化した取り組みの対応で終わるという内容でした。本当に求められていることは何なのか、学校の課題を考える中で、「なくす、へらす、かえる」の視点で検討することも必要です。そのためには、取り組みを数値だけで評価するのではなく、児童生徒の変化や協力者の気づきなどのエピソードを踏まえて振り返る必要があります。

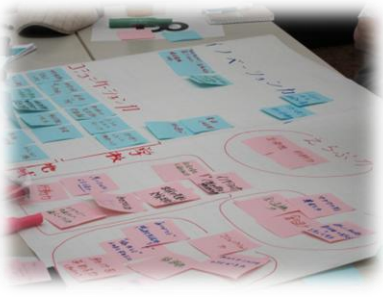


出された意見を確認しています

「熟議」体験

後半は、ワークショップを行いました。朝倉先生から始めに、現行の埼玉県教育振興基本計画である「豊かな学びで未来を拓く埼玉教育」について紹介がありました。ここで掲げられている「未来を拓く」という言葉に焦点を当てて模擬熟議が行われました。

まず、個人で「未来を拓く」ことに必要であると考えられる力をできるだけ書き出しました。その後、グループで自分が必要だと考えたものに説明を加えながら話し合い、行動力、考える力、コミュニケーション力、課題解決力など、グルーピングがされ、その上で抽象化された能力を身に付けるために効果的な、学校・地域でできる取り組みを検討しました。実際の学校運営協議会さながらに話し合いが展開され、冒頭の朝倉氏の言葉にあったような非常にホットな場が生まれました。



グルーピングの様子



検討を重ねるメンバー

学校運営協議会について、どのような運営の仕方が望ましいのかをそれぞれの立場から考える今回のセミナーを通して、それぞれの参加者が自分にできることは何なのか、他の立場の人はどんなことを感じているのか、普段の環境からは離れて知ることができたと思います。ここでの経験を各々が持ち帰り、それぞれの地域で伝えることでよりよい学校運営協議会へと寄与していくでしょう。

サテライト会場でも





初の試みで東部地区と、北部地区をサテライト会場として実施しました。

参加者の声

学校運営協議会の充実に向けて、どのようなことが必要かということを理解できた。また、全体像を校長がしっかりと組み立てなければならない、ということが印象に残った。第２回の学校運営協議会と、協働活動の充実に取り組んでいきたい。（教職員）

色々な考え方、とり組み方があることが分かりました。熟議の意味と必要性がよく分かった。（放課後子ども教室関係者）

コミュニティ・スクールを導入してから7年経ちます。講義の内容に共感するところが沢山あった。これからの運営協議会の方向性に確信が持てた。（学校運営協議会委員）

学校運営協議会の充実に向けて、どのようなことが必要かということを理解できた。（教職員）

後半の作業が具体的なものだったので参考になった。（行政関係者）

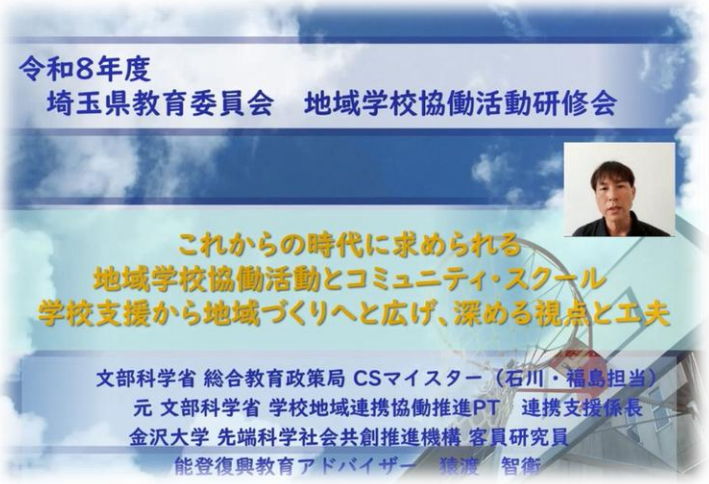




第二回地域学校協働活動推進セミナー

第二回はオンライン開催

第二回は八月二十四日にオンラインで開催しました。文部科学省総合教育政策局CSマイスターの猿渡智衛氏から「これからの時代に求められる地域学校協働活動とコミュニティ・スクール」と題しご講演いただきました。



「好き」を育み「得意」を伸ばす

初めに、次期学習指導要領に向けた「審議まとめ」についてお話しいただき、多様な子供たちの「深い学び」を確かなものにするためには、みんなで育てていくという視点が大切であるということをポイントに挙げていました。また、子供たち一人一人の特性に合わせた、自分の「好き」を見つけて「得意」を伸ばしていくことは地域学校協働活動と親和性が高いとのことでした。

さらに、学校外での様々な体験や学びを、学校教育にうまく整理統合していくこと、また、学校で学習したことを地域社会に出て、いろいろな方々と一緒に深めていくことも大切であると指摘しました。

当事者意識をもって

地域学校協働活動の参画には当事者意識をもつことが重要です。第二回のセミナーはオンラインでしたが、自由にチャットができたり、ブレイクアウトルームの時間を設定したりして、主体的に参加していただくことができました。

参加されている方がご自身で取り組まれている地域学校協働活動を共有する時間がありました。

さらに、話し合ったことを発表していただきました。読み聞かせや授業補助などの学習支援、除草作業や花壇整備などの環境支援、登下校の見守りなどの安心・安全支援等、様々な取組をされている中で、考えていること、見えてきたこと、課題と感じていることを共有しました。



～参加者から得られた主な意見～

1. 地域と学校の連携強化の必要性

地域住民、自治会、NPO、教育委員会、学校現場が互いに連携し合うことで、子供たちの学びや成長をより豊かにできるとの共通認識。
地域の多様な資源・人材（高齢者、地域ボランティア、企業など）を積極的に活用し、学校活動を支援する重要性が強調された。

2. 地域コミュニティの活性化と学校支援の両立

地域学校協働活動は、地域コミュニティの活性化にもつながるとの見方が多い。
学校と地域が一体となりイベントや学習支援、子育て支援を行うことで、地域の絆を深める効果が期待されている。

3. 多様な活動の展開と工夫

放課後子供教室や学習支援、文化・伝統継承活動、食育、スポーツ振興など、多岐にわたる活動が活発に行われている。
それぞれの地域の特性を生かした多様なプログラムを企画・運営している点が共有された。

4. 子どもたちへのきめ細かい支援
教育支援や生活面でのサポート、居場所づくり、体験活動など、子供たち一人ひとりに寄り添った支援の必要性が共通の認識となった。
支援対象の幅も、多様な子供のニーズに応じて柔軟に対応している。

5. 活動推進の課題と今後の展望
ボランティアの安定確保や連絡調整の負担、地域間での連携の難しさ、活動資金の確保などの課題が指摘された。
各地の成功事例を共有しつつ、他地域への波及や継続的な活動体制の構築が求められている。

6. 教育委員会や行政の役割
教育委員会や行政が「つなぎ役」として、地域・学校とボランティア等をコーディネートする重要な役割を果たしている。
今後も積極的な支援と、情報共有の充実が望まれる。

支援からの脱却

「支援」から「連携・協働」に向かうための方策として、猿渡氏は具体的な例を挙げながら、「ｗｈｙ(なぜ)」の部分と「ｈｏｗ(どのように)」の部分を考えることが大事と強調しました。また、持続可能なものにしていくには、具体例を挙げ「子供たちとの交流が促進していく」形で地域の方の思いや、ボランティアに協力いただく工夫が大切だと伝えました。

コミュニティ・スクールとの一体的推進

コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進について、猿渡氏は「学校に通う子供たちは、将来、地域づくりの創り手となる地域人材となる。しかし学校の先生は目の前にいる「現在の」子供を教育することが中心。本来は、もっと俯瞰的に子供の育ちをとらえる地域視点が大切で、学校の先生だけではなく、地域の多様な人々が参画する仕組み(コミュニティ・スクール)と具体的な機会(地域学校協働活動)が大切。」と伝えました。

参加者の声

豊富な事例をもとに、具体な取組を考えるきっかけになった。学校運営協議会と防災との関わりについては、とても興味深く拝聴させていただいた。また、参加者とのブレイクアウトルームでのやりとりは、様々な立場の形の話が聞けてとてもためになった。（行政関係者）

他市においてもいろいろな課題を抱えながら取り組んでいるということが分かった。今後の活動の中で活かしていきたい。（放課後子供教室関係者）

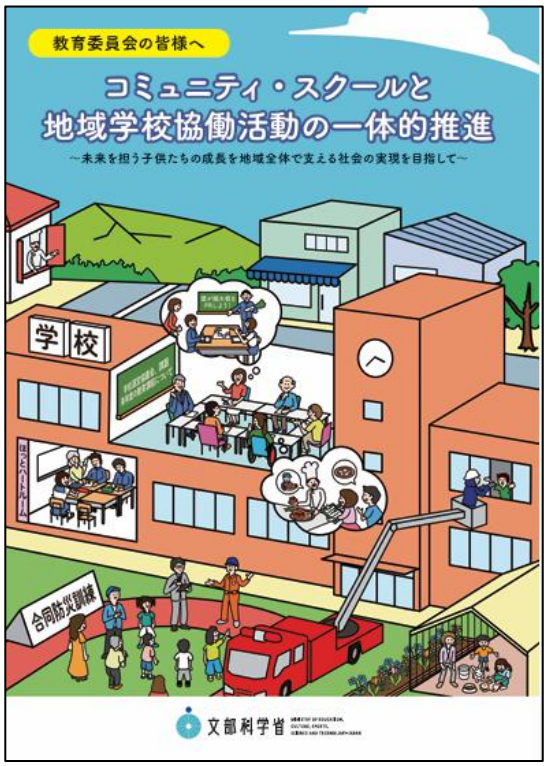
地域でどのような子供を育てるか？自地域を好きになれる取り組みを、地域と学校で少しずつ進められるよう協力していきたいと思った。（学校運営協議会委員）

本校の学校教育目標を達成するために、地域と学校をつなぐ取組が具体的に見えてきた。学校運営協議会を堅苦しい形にせず、お互いに困っていることを共有し、それに向けて何ができるか話し合っていく必要性を感じた。（教職員）

他自治体の状況等が共有でき、勉強になった。地域と連携し良い関係を継続できるよう取り組んでいきたいと思う。（行政関係者）

子供たちと地域と学校と保護者とつながりながら30年あまりになる。大きな枠にある行政、学校、地域の中で個人個人が大切にされていくにはどのような提案があるのか考え方のヒントになった。（学校運営協議会委員）

コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進に向けて



この手引きは、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な取組を推進していく際の参考となるよう作成されています。教育委員会向けの手引きですが、興味のある方はぜひご覧ください。



埼玉県マスコット
「コバトン」「さいたまっち」

コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進（令和8年3月文部科学省）

令和8年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況

文部科学省では、地域とともにある学校づくり、学校を核とした地域づくりを進め、未来を担う子供たちの成長を地域全体で支える社会を実現するため、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）と地域学校協働活動の実施状況等に関する全国的な調査を毎年、実施しています。

この度、令和８年度の調査結果が公表されましたので、ご案内いたします。

学校と地域でつくる学びの未来
School Home Community

令和8年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況について

令和8年度　地域学校協働活動実践交流会　開催

令和9年
1月26日(火)
13:30 ～ 16:30
会場：県民健康センター

昨年度から始まった実践交流会！
今年も開催します！！
詳細は後日、市町村教育委員会を通じて
御案内いたします。

地域学校協働活動情報通信CoLLABoは
地域と学校が相互にパートナーとして、連携・協働していくことが求められている今、県内各地の学校と地域の協働(collaboration)の様子について紹介していきます。年間5回の発行を予定しております。

発行元：埼玉県教育局教育総務部生涯学習推進課　令和8年11月発行
電話：048-830-6979 メール：a6975-05@pref.saitama.lg.jp(ご意見、ご感想、取材依頼はこちらまで)